

一ツヤ遺跡 I

—個人住宅建設工事に伴う発掘調査—



平成24年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言	
I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 遺構と遺物	2
IV 調査の結果	5
写真図版	

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が平成23年度に行った個人住宅建設工事に伴う事前の発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市平田町に位置する。
3. 本調査は、現地調査を平成23年5月31日～平成23年6月17日の間実施し、のちに整理調査を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会事務局文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

文化財部長：谷口 徹 次長兼課長：上田博司

課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦

史跡整備係長：北川恭子 副 主 査：池田隼人

主 任：深谷 覚 主 任：辻 嘉光

主 任：森下雅子 主 任：林 昭男

主 任：三尾次郎 技 師：戸塚洋輔

技 師：田中良輔 技 師：下高人輔

臨 時 職 員：佃 昌幸

5. 本調査には以下の諸氏が参加した。
(発掘調査) 池端清 大橋俊一 小笠圭子 田部健次郎 佃昌幸 辻節夫
友田男 森和代 (五十音順・敬称略)
(整理調査) 市田政子 川崎浄子 佃昌幸 (五十音順・敬称略)
6. 本書の執筆及び編集は田中良輔が行った。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会にて保管している。

I はじめに

本書は、個人住宅建設工事に伴って実施した、一ツヤ遺跡（彦根市平田町地先）の発掘調査成果をまとめたものである。調査は、平成 23 年 5 月 31 日から平成 23 年 6 月 17 日まで現地調査を実施し、その後、整理調査を行い本報告書の刊行となった。

II 位置と環境

【地理的環境】

調査地である一ツヤ遺跡は、彦根市北部の平田町に所在する。今回の調査地周辺は、河川により形成されたと考えられる砂礫および粘質土からなる堆積層を基盤層としている。現在、芹川は雨壺山の北側を南東から北西方向へと流れているが、今回の調査地の南方約 100 m の地点では、試掘時に河川の旧流路と思われる堆積層を検出しており、いつの時代かは不明であるが、かつての芹川もしくは平田川などが、雨壺山の南側に大きな流れを形成していたものと推定される。

こうした環境から、周辺では湧水が多く見られ、明治 4 年の耕地絵図においても、沼沢地の描写が見られる。また、周辺の字名には「大沢」・「月沢」・「湯でん」などの湧水に関わる地名が多く見られ、この土地の性状をよく示している。



また、古くからの屋敷地については、そうした低地部分よりも一段高い、雨壺山寄りの微高地上に形成されている。こうした状況は、明治4年頃に製作された『犬上郡平田村耕地絵図』に描かれた状況とも一致しており、往時の状況を現在でも良好に伝えている。

今回の調査地は、こうした屋敷地の西端、水田域よりも標高の高い地点に位置していた。

【歴史的環境】

平田町については、東に朝鮮人街道、西には巡礼街道が南北に並走しており、交通上有利な立地となっている。また、朝鮮人街道の東側に位置する雨壺山の山麓には、長久寺や新神社などをはじめ、複数の寺院や神社が点在するなど、宗教施設が多く集まる地域でもある。現在では平田町の中南部に位置している明照寺についても、延徳二年（1490年）に現在の多賀町後谷から雨壺山南麓の山之脇町へと移転してきており、以降江戸時代中期、元禄十四年（1701年）に現在地へと移転するまで、約200年に渡り同地に位置していた。

現在、明照寺の寺域内には寺中寺院として、眞成寺、妙寺、得法寺などの三ヶ寺が存在している。明照寺が山之脇にあった当時の状況については不明な点が多いが、雨壺山南麓に位置する葉師堂の通称に、「しんじょさん」という「眞成寺（しんじょうじ）さん」が訛ったものと思われる呼び名が見られることから、あるいは現在と同様、複数の塔頭を擁する、規模の大きな寺院であった可能性が考えられる。戦国期の明照寺については、近江国内有数の本願寺方の拠点として、多数の門徒を擁していたとも伝わることから、そうした可能性は比較的高いものと思われる。

III 遺構と遺物

基本層序

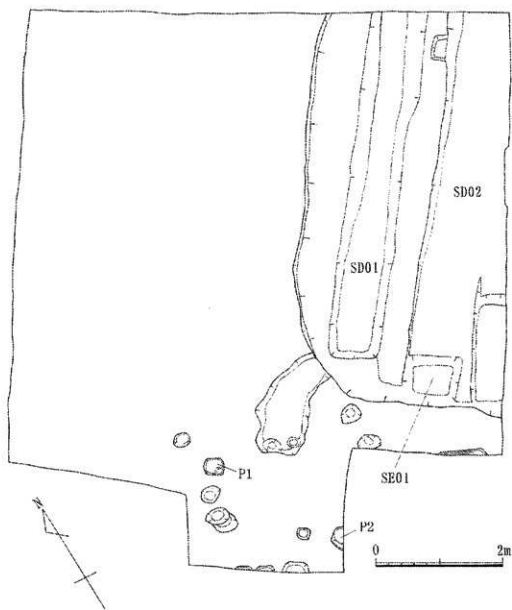
今回の発掘調査地点においては、表土層である耕作土および床土が約50cmあり、その下部において、遺構面である地山Ⅰ・地山Ⅱの上面を確認した。

地山Ⅰは粗粒砂からなる白黄褐色砂質土層で、遺構面から0～30cmの厚さで堆積しており、調査区西半側の地山面を形成している。次に、地山Ⅱは黄褐色粘質土層で、遺構面0～30cm程度の厚さで堆積していた。調査区の東半部はこの層によって地山面が形成されており、地山Ⅱは地山Ⅰの下層へと潜り込んでいる。近隣は、河川による堆積作用によって形成された土壌となっていることから、この地山Ⅰ・Ⅱ層についても、そうした堆積層の一部であると考えられる。

地山Ⅰ・Ⅱ層以下は、灰色の粘質土層となっており、調査区内における下層のほぼ全体を占めている。

検出遺構

発掘作業は、地表面から約50cm余の造成土を除去したのち、地山Ⅰ上面において遺構の検出を行った。その結果、溝2条（SD01・02）、井戸1基（SE01）、ピット群などを検出した。以下、各遺構について詳述する。



一ツヤ遺跡Ⅰ次 遺構配置図 (S=1/60)

図 2

溝

SD01 (図3)

SD01 は、周辺地割に並行する軸に構築された溝である。規模は、調査区内において長さ約 6.2m、深さ約 50cm、上幅約 85cm、底面幅約 60cm を測る。

SD02 (図3)

SD02 は、周辺地割りに並行する軸に構築された溝である。規模は、調査区内において長さ約 7m、深さ約 60cm、上幅約 150cm、底面幅約 115cm を測る。SD01 に近接・並行しており、SD01 の埋土を切る形で構築されていた。

井戸

SE01 (図3)

平面プラン隅丸正方形を呈する。規模は一辺約 90m を測り、深さは約 160cm を測る。SD02 に切られる形で検出しており、その位置は SD02 の端部にほぼ重複する。この井戸からは、現状で多量の湧水を確認しており、掘削された当時においても、あるいは遺構面近くまで、地下水が湧出していた可能性がある。

出土遺物

川土遺物については、各遺構から陶磁器や土師器皿のほか、石臼・曲物といった様々な遺物が出土している。以下、遺構ごとにその詳細を記述する。

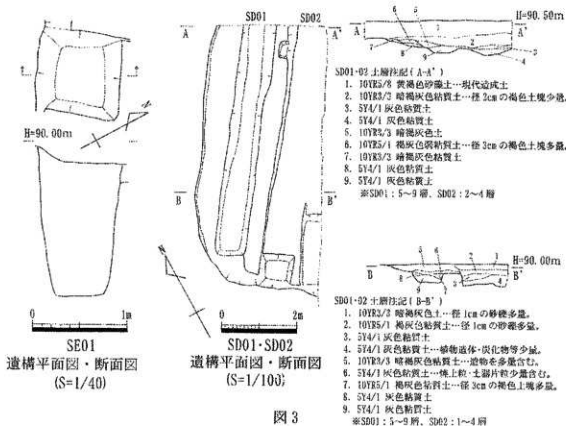


図3

SD01 (1)

SD01 からは、瓦質の土鍋の小片 (図 4-1) が出土している。また、この他に土師器皿の小破片が数点出土している。

SD02 (3・4, 6~18)

SD01 の埋土からは、土師器皿 (図 4-3・4, 7・8)、白磁碗 (図 4-6)、広口壺の可能性がある古瀬戸 (図 4-9・10)、信楽焼 (図 5-11) 瓦質土鍋 (図 5-12)、焙烙 (図 5-13)、越前産播鉢 (図 5-14)、木製履物片 (図 6-15)、木製タモの部材 (図 6-18)、石臼 (図 6-19) などが出土した。

これらは、白磁碗のみ 11 世紀後半～12 世紀前半頃の年代を示すが、その他は形態的特徴などから、概ね 15 世紀後半～16 世紀前半頃の年代を示す。また、溝の下層から中層にかけては、その埋土中から梅や桃、瓜等の種子類が多く出土している。

上記の出土遺物については、特に溝の南東端部付近において多く見られることから、この溝が途切れる地点が、廃棄場所もしくは生活用具の洗浄等、比較的日常生活空間に近い立地であったことが想定される。

SE01 (16・17)

SE01 については、内部から曲物片 (図 6-16・17) が出土している。また、図示したもの他、小片が数点出土していることから、本来はこの曲物を井戸枠として設置していたものと思われるが、大半は廃絶時に抜き取られたものと思われる。

小穴群 (2・5)

小穴群からは、P1 から (図 4-2)、P2 から (図 4-5) などの土師器皿が出土した。いずれも小片のため時期の特定は難しいが、概ね周辺遺構の遺物と時期差は無いと考えられる。

IV 調査の成果

今回の調査地点については、概ね 15 世紀後半～16 世紀前半を中心とした集落跡であったことが明らかとなった。この当時には、冒頭でも触れた明照寺が多賀町の後谷から雨産山の南側一帯へと移転してきており、大きな努力を持っていたことが分かっている。このことは、その近隣に位置するこの集落についても、何らかの関係があった可能性が考えられる。

溝については区画溝としての機能がかったものと考えられるが、当初の小規模な溝 (SD01) からやや規模の大きな溝 (SD02) へと掘り直しが行われていることから、ある時期において、溝の性格が変わった可能性も考えられる。この変遷については、あるいは井戸 (SE01) の掘削など、水利面での変化があった可能性も考えられる。しかし、遺物面からは、これらの変遷に大きな時期差は見られないため、極めて短期間のうちに SD01 から SD02 へと移行したものと考えられる。

以上、今回の調査について概観してきた。これまで一ツや遺跡における発掘調査は行われておらず、その実態については全く不明であったが、今回の調査により当地周辺の中世段階

の状況についての貴重な手掛かりを得ることができた。今後は、これを嚆矢として、新たな知見の増加に期待することとしたい。

出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	類別	反転 器化	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	その他
1	SD01	瓦質土器	土鍋	反				(外面) 灰色(内面) 細灰色	
2	P1	土師器	甕	反	8.0	1.8		(内外面) 灰色	
3	SD02	土師器	甕		8.0	1.9		(外面) 淡黄色(内面) 灰白色	
4	SD02	土師器	甕		8.5	1.7		(内外面) 淡黄褐色(口縁端部) 黒色	
5	P2	土師器	甕					(外面) 淡黄褐色(内面) 褐色	
6	SD02	白磁	甕					(内外面) 灰白色	
7	SD02	土師器	甕	反	8.7	1.8		(内外面) 褐色	
8	SD02	土師器	甕	反	8.6	1.6		(外面) にふい黄褐色(内面) 淡黄褐色	
9	SD02	古瀬戸	広口壺か	反			5.4	(内外面) 灰白色	胴部最大径: 10.4cm
10	SD02	古瀬戸	広口壺か	反			9.0	(外面) オリーブ黒色(内面) 灰色	
11	SD02	信楽焼	糠鉢か	反			13.6	(外面) 明赤褐色(内面) 褐色	
12	SD02	瓦質土器	土鍋	反	23.8			(外面) 淡黄色(内面) 灰黄色	
13	SD02	土師器	燗壺	反	30.2			(外面) 黒色(内面) 明細灰色	
14	SD02	陶器	糠鉢		32.4			(外面) 淡黄色(内面) 灰黄色	匙前蓋か。
15	SD02	木器	塵物			4.1	14.3		
16	SD02	木器	曲物				19.0		井戸枠片。
17	SD02	木器	曲物		13.8	13.7	13.0		井戸枠。樹皮による結実痕跡。
18	SD02	木器	夕毛		9.0	8.3	4.2		網を取り付ける胸部分。
19	SK01	石器	石臼			14.3	2.0		

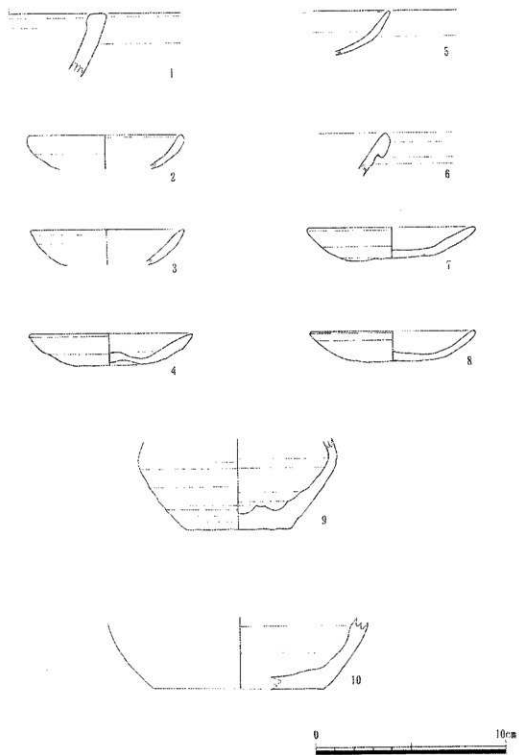


图 4

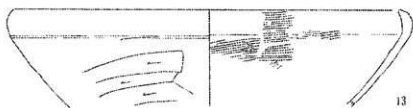
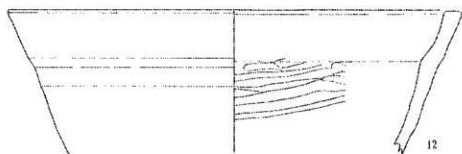
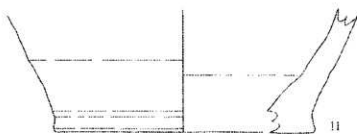


图 5

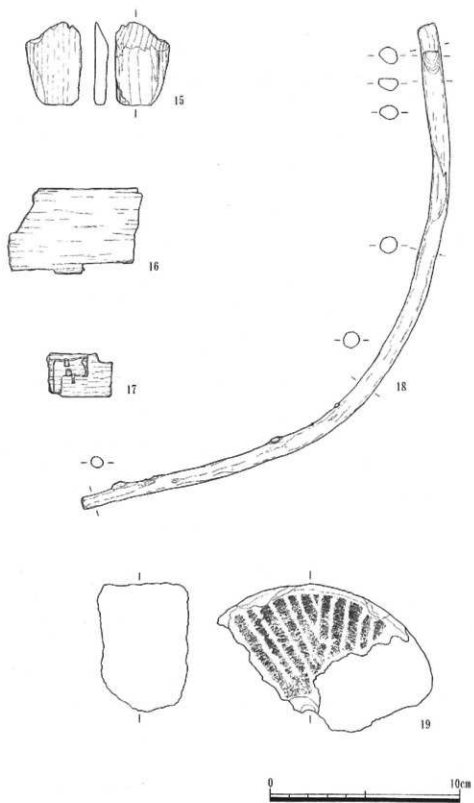


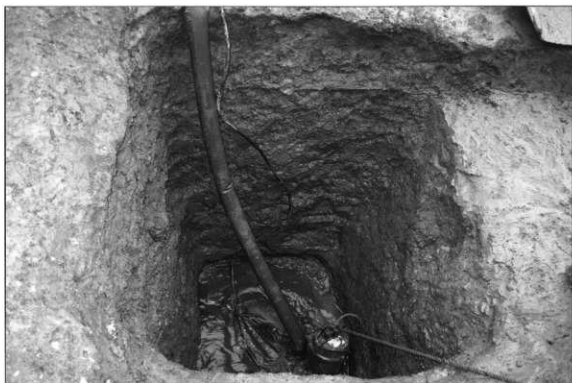
图 6



調査全景（南から）



発掘調査状況（南西から）



SE01完掘状況(東から)



SE01土層断面(東から)



曲物出土状況（西から）



曲物出土状況（西から）



SD01・02完掘状況(南から)



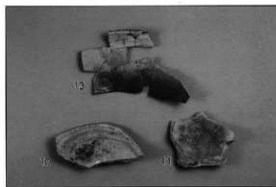
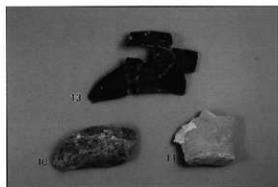
SD01・SD02 土層断面①(南から)

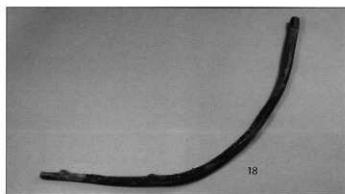
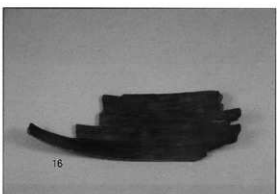
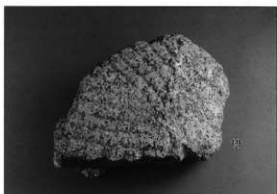
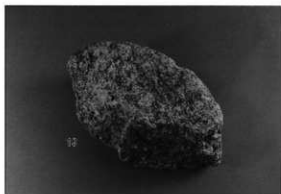


SD01・02 土層断面② (南から)



SD02 遺物出土状況 (東から)





報告書抄録

ふりがな	ひとつやいせきⅠ							
書名	一ツヤ遺跡Ⅰ							
副書名	個人住宅建設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	52							
編著者名	田中良輔							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20120331							
しよしやういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		世界測地系		調査 面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
一ツヤ遺跡	ひこねし 彦根市 ひらたちよう 平田町 地先	25202	007	35度 15分 29秒	136度 14分 46秒	205.26㎡	20110531 ～ 20110617	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な建物	特記事項			
一ツヤ遺跡	集落跡	中世	溝 井戸 小穴群	土師器 瓦質土器				

彦根市埋蔵文化財調査報告書第52集

一ツヤ遺跡Ⅰ

—個人住宅建設工事に伴う発掘調査—

平成24年(2012年)3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL0749-26-5833

印刷・製本：有限会社 つくし出版印刷
滋賀県彦根市戸賀町120-32

SITE OF HITOTSUYA

March, 2012

**Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division**